

692^P-2/11

⑤690^P-11/ 縄の表から
(次頁)なまぐさな鉄⑥692^P-3/11~

ちや ⑥691^P-6/6

のであろう。

(④-三七頁参照)

⊗

へ九洲南端の軍人等の武力を増強し、最大
限に活用しよう。
と企てたに違いない。
■とはいえ、軍人等の特訓の為なのだから、
戦闘用の強靱な武器へ本物の武器を使用す
る必要性は無い。
■こうしたわけでは、成りの地へ、
へ扶余系殷民の子孫達にわたって作らせた
訓練用の鉄製武器は、焼入水いていない鈍
な武器(か)もたらされた。
なまぐさな鉄

④ 692⁰-3/
699, 125T

へなまくだな鉄器^{てつぎ}について、補足^{ほぞく}してお
 きたい。

東地区^{とうちく}・北地区^{きたちく}を調査したところ、遺物^{いぶつ}は
 上層^{じやうそう}から下層^{かそう}へ、~~土壌墓~~から、それ
 がゴキヤゴキヤといつた表現^{ひやうげん}がふさわしいは
 ど、~~混然~~といた状態で発見された。

但し、土壌墓^{どじやうぼ}が重複^{じゆうふく}しているわけではない。

そして墓穴^{はかあな}中の鉄器類^{てつぎるい}は、ほぼ原位置^{げんいち}を留^{とど}
 めているようである。

つまり、覆土^{ふくど}上^{うへ}にあるいはその中の遺物^{いぶつ}（供
 献品^{けんひん}）は大いに動いたものの、埋葬^{まいそう}遺体^{いたい}や傍^{かたわ}
 らに置^おかれた遺物^{いぶつ}、副葬品^{ふくそうひん}はそのままの位
 置^ちに残留^{ざんりゅう}したと考えられる。

その水^{みづ}にいても、本遺跡^{ほんいせき}出土^{しゅつど}の鉄器類^{てつぎるい}のほと
 んどが曲^まがっている。大きく曲^{まが}っているもの
 も、~~鉄器~~多数^{たすう}有^ある。

おお、
 おお、

ある

な
い
か
ら
で
あ
る
。

の
は
、
日
焼
入
れ
の
技
術
を
採
用
し
て
い
る
。

成
川
遺
跡
出
土
の
鉄
器
類
の
強
さ
が
曲
か
っ
て
い
る
。

鉄
製
品
を
造
る
方
法
に
は
、
鑄
造
と
鍛
造
が
あ
る
。

鑄
鉄
は
、
堅
い
け
れ
ど
も
、
折
れ
易
い
と
い
う
欠
点
を
持
つ
。

成
川
遺
跡
で
出
土
す
る
鉄
器
は
、
曲
か
っ
て
い
る
。

鍛
造
の
場
合
は
、
鍛
造
に
よ
つ
て
造
ら
れ
た
と
推
察
さ
れ
る
。

鍛
造
の
こ
の
欠
点
を
カ
バ
ー
す
る
為
に
は
、
日
焼
入
れ
を
入
れ
な
け
れ
ば
な
ら
な
い
。

形
を
整
え
、
最
後
に
日
焼
き
を
入
れ
下
堅
さ
を
得
る
の
で
あ
る
。
（
＊
な
お
、
こ
の
方
法
で
は
、
折
れ
や
す
く
な
る
と
い
う
欠
点
が
幾
分
か
発
生
す
る
）

成
川
遺
跡
出
土
の
鉄
器
類
の
強
さ
が
曲
か
っ
て
い
る
。
技
術
を
採
用
し
て
い
る
。
な
い
か
ら
で
あ
る
。
の
は
、
日
焼
入
れ
の
技
術
を
採
用
し
て
い
る
。
成
川
遺
跡
で
出
土
す
る
鉄
器
は
、
曲
か
っ
て
い
る
。
鍛
造
の
場
合
は
、
鍛
造
に
よ
つ
て
造
ら
れ
た
と
推
察
さ
れ
る
。
鍛
造
の
こ
の
欠
点
を
カ
バ
ー
す
る
為
に
は
、
日
焼
入
れ
を
入
れ
な
け
れ
ば
な
ら
な
い
。
形
を
整
え
、
最
後
に
日
焼
き
を
入
れ
下
堅
さ
を
得
る
の
で
あ
る
。
（
＊
な
お
、
こ
の
方
法
で
は
、
折
れ
や
す
く
な
る
と
い
う
欠
点
が
幾
分
か
発
生
す
る
）

曲692
-2/11
9行

84
用11
2行
4行

鉄器や矛の形式から判断して
 版 690-4/11 7行 真剣(剣型342) 690-3/10 692-5/11
 新や再校(2) 221P
 結末の表から ④ 688 -3/8

691-3/5 20行

判断して、六世紀の前半期に及ぶし
 成川遺跡の下限は、鉄鍬や矛の形式から
 なるか、
 ともあり、曲がりやすい。
 一たがって、実際に用いるには、甚だ心許
 ない。
 ④ 一三四九頁参照
 倭人達は、極南東(宇土・八代地方)以南
 に居住している扶余系殷民の子孫等に、鉄製
 武器(なまくらな鉄器、あよび焼入した鉄
 器)を作らせた。
 軍人等の訓練用として成川の地へ持ち込
 めた各種の武器は、なまくらであり、
 底実用に堪えなかった。
 倭人達は、武術を学んだ軍人らの反乱を警
 戒し、あえて焼入した武器を
 手渡さなかったのたろう。
 と思われ。

348体 690 最上の骨では「もう一つ」 690 8/10 12行
 233体 8/10 690 8/10
 692 6/11
 北地区 115 689 2/11 135

前20行 690-47 5行

と考えられている。(2) 1-107-18頁参照

恐らく、

へ六世紀前半期当時の軍人達が武芸修業に

用いていた鉄器も、なまくらだった。

のであろう。

あるいは、

へ成川の地で戦闘技術を磨く武人達は、

練中に曲がって、

却せず、

同族の兵らが眠る墓地に供え、

祈りを捧げたのかも知れない。

などと想像される。(1) 1-142頁下段参照

成川遺跡のいま一つの特徴は、へ幼・小児

骨が著しく少ない。という点である。

北地区の出土総数二五体のうち、幼・小児骨は

四体しか存在せず、成人骨の数量に比べると

幼・小児骨の量が少なすぎる。

といわれている。(3) 1-133頁、二五六頁、二六二-四頁参照

また、成川遺跡の成人の大部分は、歯の咬

死亡命令が低い
報告書 264
女性 89
復 へる

→ 692-7/11 →

（磨り減り）か非常に弱いので、

「死亡した年齢は低く、壮年、あるいはそ

という。（③）一五六頁。二六四頁参照）

男性と女性の比率について、よく分らない

が、

「女性四例（40号、79号、93号、101号）が

見いだされた

と報告されている。（③）一五六頁参照）

※尚、

「女性四例は、皆、短頭型であった」

という。（③）一四二―二五一頁参照）

＊成川遺跡の練兵場で、武術を学び、一定の年

齢に達した者等は、戦闘が行なわれている所

へ配属されるので、必然的に、成川の地

で亡くなるのは、若者が多いのだろう。

（*）

692⁸-9/11

紀下153⁸ 注14

月条^{ひだつ} 敏摩^{びん} 紀十四年八月条^{ひだつ} 他参照^{（）}

(*)

大系、岩波書店、一五三頁、注十四^{（）} 神代紀
(甲) 海宮遊幸章^{りちやうき} 履中即位前紀^い 清寧紀元年十

ようである。(「日本書紀」(甲) 日本古典文学

いたし

て、宮門^{きやうもん}の警備^{けいび}や、^{もがりのたか} 殯^い庭^{てい}の警固^{けいこ}などに^{あた}当^あつて
「軍人^{ぐんじん}は、古^{ふる}くから倭人^{わじん}社会^{しゃかい}の中央^{ちやうおう}に出^でて、

へも進出^{しんしゅつ}した、と考えられる。
れた軍人^{ぐんじん}と、^は倭人^{わじん}、^は特^{とく}に大伴氏^{おほともい}と強^{つよ}い^き絆^{きずな}で結^{むす}ば
国^{くに}の中央^{ちやうおう}部^ぶ

→前項

692^P-10/11

大丸 内蔵の
マル 小丸

青ゴラ・白ゴラ
青ゴラ ⑥ 688^P-1/8

かごしま孝 35頁

うなぎの
鰻池 地名 229p

(*)

か。①一三五、一四三頁参照)

し、どうやって生活を維持していたのだろう

地を営んだ数百年もの長きにわたり、大墓

わけていかなかったことは明らかだ。

時代一古墳時代に、成川の地で稲作が行な

付近に、大きな川はない。

こういう自然環境を考えた場合、弥生

た火口跡で、成川マールと呼ばれてい

成川盆地もまた、約五千年前の噴火ででき

積もり、昔から農家の人たちを近かせてき

ラ、赤ゴラといわれる火山噴出物が厚く降り

この一帯の大地には、農業に不向きな青ゴ

今カルデラ湖等々、火山が多い。

成川遺跡周囲に薩摩半島南東部には、

開聞岳・鰻池火山・池田湖(もと火山、

50M

11 $12.4(7/5) \sim 12.6(3\Box)$

古代の日本 3 元 11 月 109^P

692^P 11/11

成川金地 かごしま新143^{だいに} 大市 大如
勇猛果敢

$$\frac{12}{6}$$

⑦ 688
- 4/12

もしかいたら、勇猛果敢な尖鋭集団となつた
軍人達は、その見返りとして、倭人達
から、食料・武器等々の支給を受けていたの
ではなからうか。
殺伐とした火口跡（成川盆地）で、数百年
にもおよぶ長い期間、軍人達はただただ武道
に励んでいたのうう。
現在、成川のような墓制は一個所しか確認
されてない。

成川式土器とともに人骨や鉄器が出
た指宿市十二町下里の橋牟礼川遺跡は、
小牟礼原遺跡、指宿郡額娃町の牧之内
古墳、取次遺跡（開闢岳西北方約十町）などば
成川遺跡の延長線上にあるのかも知れない。
・いずれも、薩摩半島の南東部に位置して
る。（②）一〇九頁。第177図参照）

橋牟礼川遺跡

（およびその近傍）

橋牟礼川遺跡は、指宿市十二町下里（JR

指宿駅の南西約一町）にある。

大正七、八年の発掘調査の結果、

(1) 地表下約七十センチのところで、まず、厚さ約

九十センチの弥生式土器を含む層を確認

(2) さうに火山灰層を掘り下げると、地表下約

三メートル近から、曲線模様が施されている貝塚

式土器「縄文式土器」が見つかった。

といい、こうして

「縄文は弥生より時間的に古いこと」が、

日本で初めて、層位的に明らかにになった。

のだった。

京都大学発掘チーム団長の浜田耕作氏（当

時同大教授）は、日橋牟礼川遺跡調査報告書

（大正十年）のなかで下

「日本のポニペイとでも名づくべき遺」

かごは新 33頁

次々頁8行

⑥694P-1/9末

693^p-2/9

おいて 地方

と記述した。① 一三三四頁。⑤ の見開き表

と記述した。① 一三三四頁。⑤ の見開き表

照

指

定

一頁参照

④

橋

礼川遺跡

橋

礼川遺跡

⑥

一四八頁参照

①

前三〇〇年ころ

北九州

地方から

孫達

加、縄文晩期

川へ

出てきたのたろうか

②

あるいは扶余系

島南端

郡において

近

辺の遺跡

夜

臼式土器

⑤

出土した

①

前三〇〇年ころ

北九州

地方から

孫達

加、縄文晩期

川へ

出てきたのたろうか

②

あるいは扶余系

島南端

郡において

342

新や① -39頁→ ④

新や② -137頁 ④

新や③ -225頁 ④

橋牟礼川遺跡では、二小までのところ、弥生時代の集落が発見され、土器を廃棄した。大量の「弥生式」土器捨て場が見つかっているから、付近で「弥生時代の」集落が営まれていたのは間違いない。

（⑥）一五〇一五頁。五三頁参照）

丹波遺跡で、初めて弥生集落が確認された。時期は、弥生後期前半とみられている。

・十四軒の竪穴住居が検出され、そのうち九軒が「花弁型」住居、一軒が「竪穴内部が複数の土壁で仕切られ、平面形が花弁状」だった。

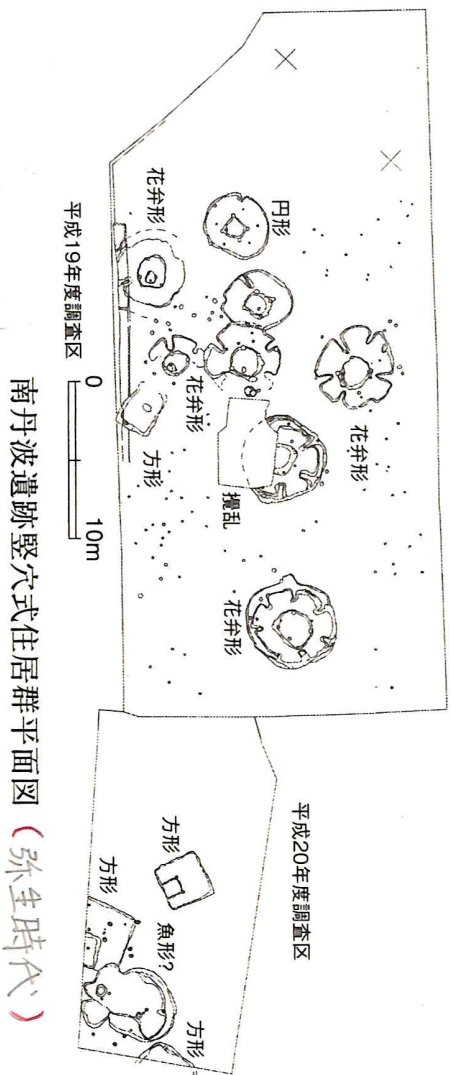
た。八号真図版138参照）

・そして、方形竪穴住居四軒が発見された。

*略内形の竪穴式住居、および方形竪穴式住居が混在している点から見て、この弥生集落には、扶余系殷民の子孫達が居住していたのだらう、と思われる。

■花弁型住居は、鹿児島県鹿屋市王子遺

頁全面に、大まか掲載下す。



南丹波遺跡竪穴式住居群平面図（弥生時代）

693^p-4/9



344

1404 写真図版 138 花卉型住居跡（南丹波遺跡、弥生時代）
 1304 上図の左側枠内、右端の花卉型住居跡である。
 『橋牟礼川遺跡』鎌田洋昭、同成社、51～52頁参照。

⑤ 橋年礼川遺跡VI (概報) 4頁
 田694¹³²⁹-8/9 並年明に留め7113
 大ニオカク丹定ニト

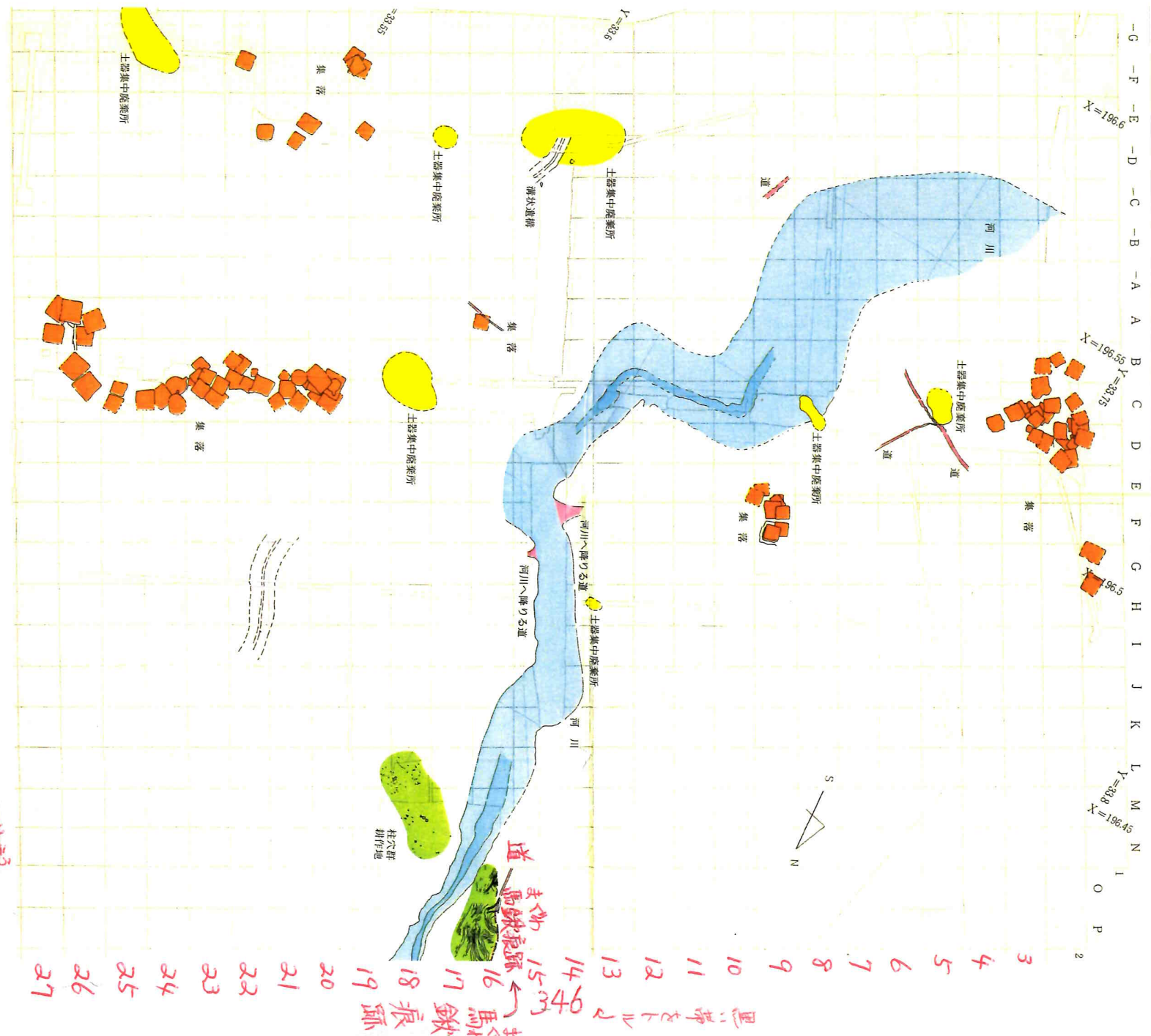
693^P-5/9

⑤ 452^P-6/13

(1) 成川式土器と叫ばれる南九州の土器 ・出土品は約七〇〇万点もある。	川遺跡の五、六世紀(古墳時代)の遺構 ・五軒に及ぶ住居跡、溝の跡、貝塚、土器捨て場、川の跡、道 ・発見された、当時の集落の様子をかなり	橋年礼川遺跡で、古墳時代の大規模な集落	(*)	本で見い出された松菊里型住居分布図の注	記参照) という。(6) 五―五三頁。第115回へ西日 里型住居の周囲に花ビラ状の突出部を設けた 堅穴式住居 跡で見られる弥生中期後半の円形住居へ松菊
--	--	----------------------------	------------	----------------------------	--

・カラー
 4冊(持ち)の線が
 消えないように御注意下さい。
 右頁全面に、はみ出し
 限度一杯大きく掲載したい。
 文字を大きく下さい。

693P-6/9



1409 第182図 橋牟礼川遺跡の5, 6世紀(古墳時代)の遺構

1304
 橋牟礼川遺跡ⅤⅥ(概報)、鹿児島県指宿市教育委員会、1994年3月発行の
 末尾に添付の第12図参照。

↑ 3471の土器捨て場 694P-3/1654

347

カラー
・左右頁にまたがて掲載。
わが水はよい。ちとつめて掲載下さい。

・杓金でHL

成川式土器
(Kinds of Kofun age potteries)

1. 鉢形土器
2. 壺形土器
3. 高杯
4. 蛸壺形土器
5. 柑形土器
6. 土製把杓

古墳時代の日常生活で使われていた器の数々。
蛸壺形土器や把杓などはローリークな土製品
は、お祭りや儀式で使われたので「はははのろろ」だ。

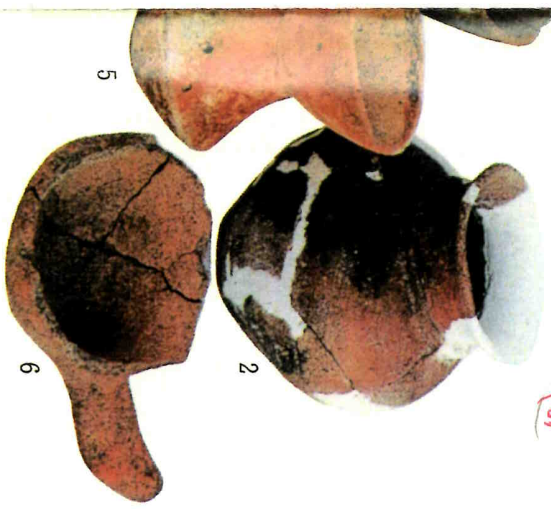


馬骨 (右下頸)

ト (Born of horse)

古墳時代の古代馬骨。歯の長さから、
4~5才前後の若い馬だということが
わかった。性別は不明。奈良~平安
時代の包含層から馬骨が出土している。
(長さ40cm)

とみられている。

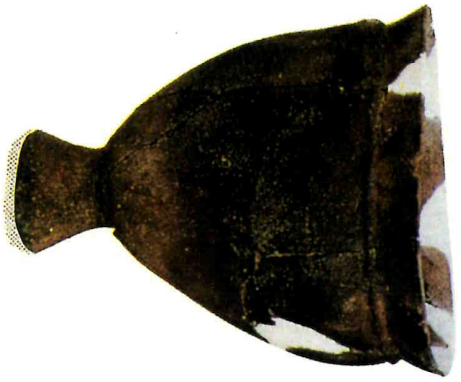


大阪の「陶邑」で生産
された須恵器。指宿と
大和との交流を示す資料
の1つである。
他にも同時期の須恵器が多数
出土した。
(高さ10cm)



須恵器 (高杯)

693P-8/9



成川式土器 (Pot with low stand)
煮沸きに使われた甕形土器。この
形は、平安時代まで継承されてい
る。(高さ約30cm)



青コラ層

古墳時代の開聞岳火山灰に埋もれた須恵器長頸壺

ト (Long-necked jar covered with volcanic ash from MT. Kaimon)

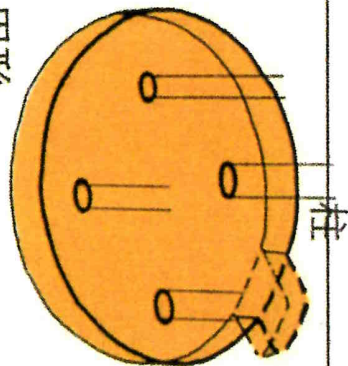
古墳時代の開聞岳の火山灰の中から、須恵器の長頸壺が発見され
壺の中にも火山灰が降り積もっていて、噴火の直前まで、地面に立った状
態で置かれていたことが判かる。右上模式図のように、噴火の途中で
倒れてしまったのだ。
壺の形から、7世紀後半頃につくられたものと
見られている。
このことから、開聞岳の噴火もその頃ではない
かと考えられる。
(高さ49cm)

1409 図版139 橋牟礼川遺跡、古墳時代の出土遺物
1309 橋牟礼川遺跡 VI (概報)、鹿児島県指宿市教育委員会、1994年3月発行、
16~17頁参照。

カラー
頁の継ぎ目、上下にわたって大きく掲載下さい。

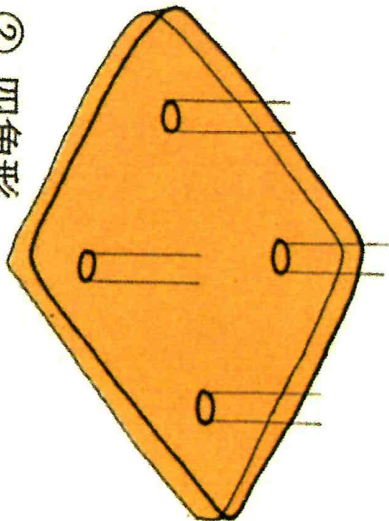
枠をH/L

枠をH/L



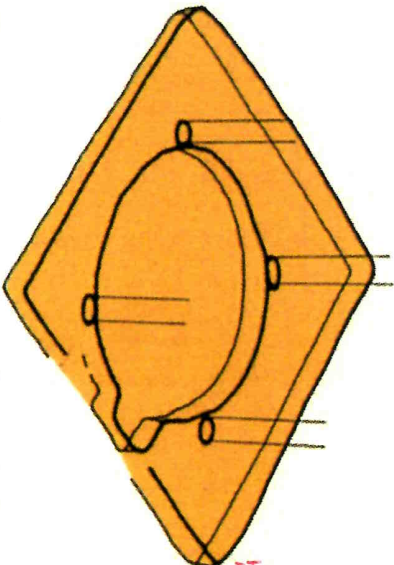
① 円形

堅穴を円形に作る。はり出し部をもつものもある。3本柱の住居も検出された。



② 四角形

堅穴を四角に作る。コーナーにはり出し部をもつものもある。2本柱の住居も検出された。多く検出されているプランである。



③ 四角と円の組み合わせ形

四角の堅穴の中にさらに柄杓状のはり出しをもつ円形の堅穴を設けている。上の2種類の住居よりやや大きい。指宿地方でこれまでに3基礎確認された。

693^p-9/9

349

1424 第183図 たてあなしきじゅうきよ しゅるい
堅穴式住居の種類

1324

1224 (橋牟礼川遺跡、古墳時代)

『橋牟礼川遺跡』VI (概報)、鹿児島県指宿市教育委員会、1994年3月発行、5頁参照。

○0年の間に作られたものだから、全てが同じ時期にあつたのではなく、建てていった期間が微妙に異なる。

・従つて、同じ時期にどの程度の住居があつたのかは、よく分からない。(5) 12(5頁参照)

＊ともあれ、円形と四角形の竪穴式住居が混在してあり、また各種の出土品を併せ考える

と、古墳時代当時、橋牟礼川遺跡の地に住んでいたのは、扶余系殷民の子孫達であつたろう、と思われる。(写真図版140参照)

■古墳時代の橋牟礼川遺跡の竪穴式住居中央には、火を使った炉跡が見られ、土が焼けて変色している。

・住居の壁ぎわに、直径五〇センチ、深さ二〇センチの穴を掘つて、場合が多い。貯蔵のため穴などの説もあるが、はっきりしない、という。

(5) 16頁。写真図版〇上・下参照)

第七章 弥生後期の狩尾・湯の口遺跡の冒頭において、正方形竪穴式住居の「南東壁中央部分」

694P-3/9

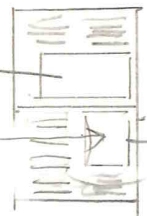
前々頁に『弥生時代の狩尾湯の口遺跡』の686頁/12 20行
と記述している。

トIV
に「ほ」援いて、不整形に浅く掘りくぼめ、
の内側に「対」の小穴を穿っている。
松菊里型住居内の楕円坑長軸両端にあった
二つの小穴が――――――遙かな時を経て、様
式を少々変えながらなお存続していたの
ではなからうかし
と述べた。
*その後、古墳時代においても、
へ扶余系殷民の子孫達は、住居内の壁ぎわ
に浅い穴を掘っていた✓

次
拾て場がある。(第182図。写真図版141の(1))
(2)へ土器捨て場(参照)
。例えは、第182図中、Cの縦列三個所の土器
捨て場から、いずれも数千点の土器や石器が
見いだされた。
。土器捨て場には、貝か一点も捨てられ、お
らず、貝塚(生ゴミ捨て場)とは区別さ
る。堅穴式住居群の周辺には、必ずと言って
よいほど、土器や石器を多量に捨てた口土器
捨て場がある。

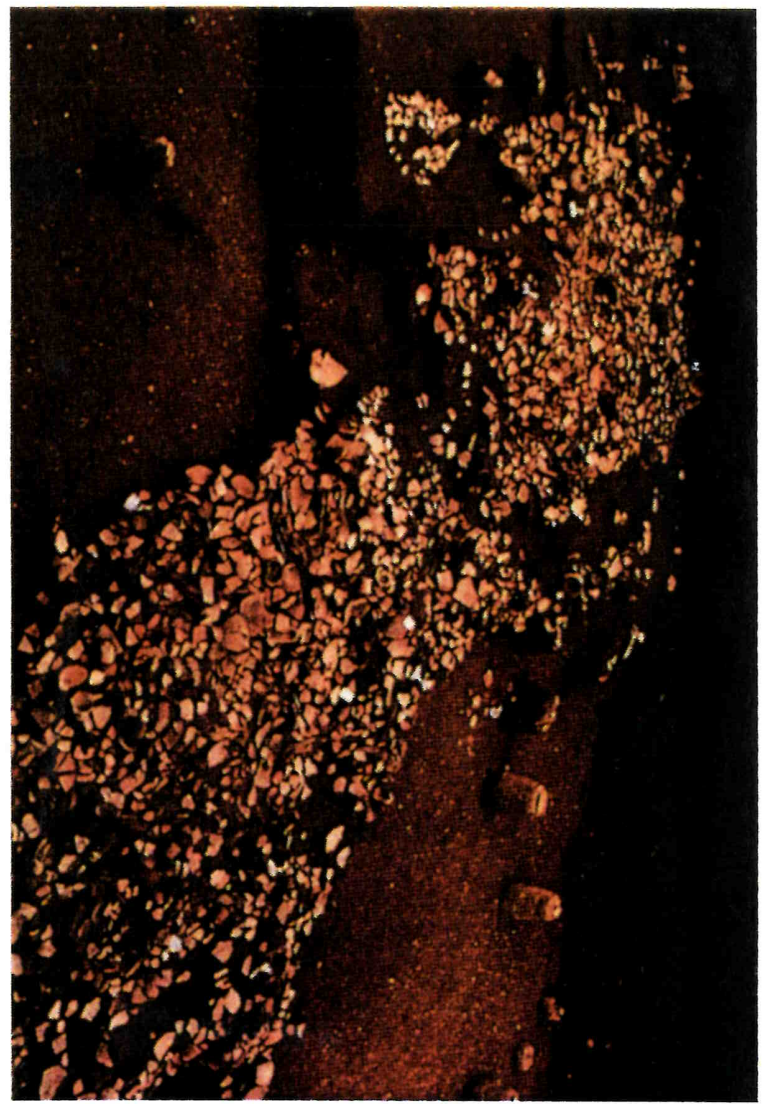
カー
右側の左端。上へは大きく掘り下さす。

上



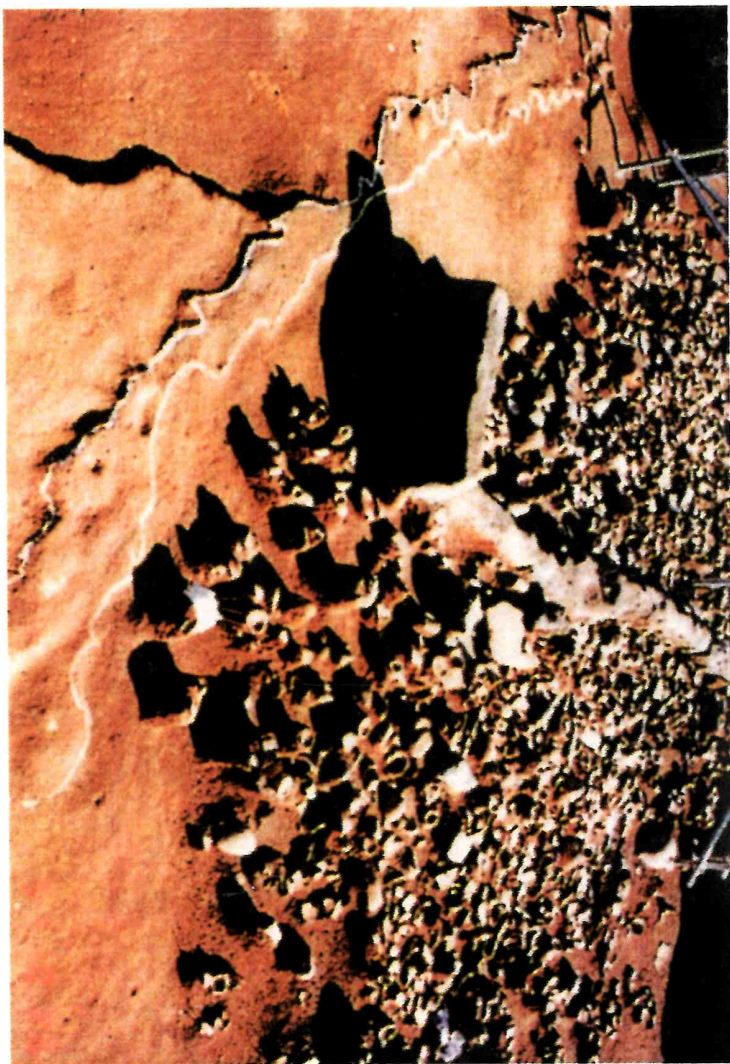
次頁

694P-4/9



上

ト
X
どきす
土器捨て場 (ヤメル)



(4)
どきす
土器捨て場と古道(白線部分)

カ-1
左頁の右端。上にはみ出た大きき掲載下さい。

カ-1
↓



694^p-5/9

(2) 土器捨て場と古道

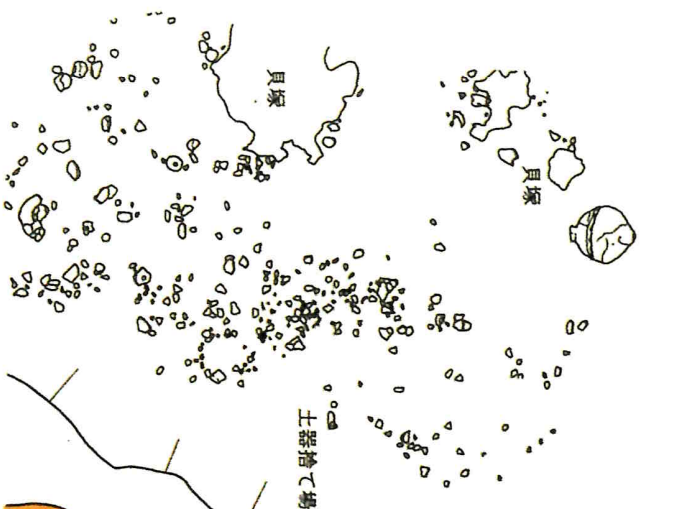
写真図版 141 土器捨て場、および古道 (古墳時代)

『橋牟礼川遺跡』VI (概報)、鹿児島県指宿市教育委員会、1994年3月発行、
6頁、9頁参照。

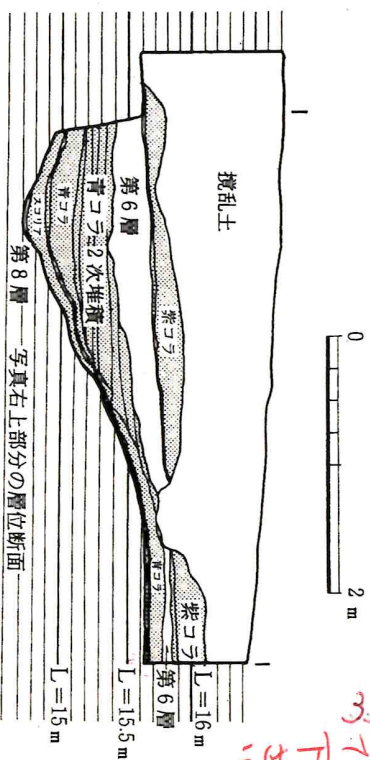
694^p-6/9

いていたようである。(⑤一六頁参照)
 貝塚は、直径一・五に程度の小さなものが
 多い。(第184図(左上)の二ヶ所(参照))
 貝塚の中から、貝のなかに動物の骨も見
 される。
 ・貝塚はいわば人生ゴミ捨て場であり、当
 時、臭気もあつたに違いない。
 ・これまでの調査では、住居跡の近くで貝塚
 が見つかつていない。
 ・生臭さを嫌ひ意識して集落の外側に貝を捨
 てたのだろう(⑤一六頁参照)
 古墳時代の橋牟礼川遺跡には、不思議な溝
 が掘られてゐる。(第182図の左端中央あた
 り。第184図参照)
 ・幅二、三、深さ一・五、二に程度。
 断面がU字形をした溝である。
 ・溝から、水が流れた跡は見つかつていな

カラー
頁全面に、大々掲載下さい。



694^P-7/9



1409 第184図

みぞじょういこう
溝状遺構の平面図・断面図

1309

1209 (橋牟礼川遺跡、古墳時代)

『橋牟礼川遺跡』VI (概報)、鹿児島県指宿市教育委員会、1994年3月発行、7頁参照。

「溝底」とおいて下さい。356

溝底

見極めろ ⑤ $695 \div 19 = 36$ 斤

大空から
土壌へ

694P-9/9

に
あ
ら
わ
る

大

のであろうで

・つまりそうしたわけで、

橋牟礼川遺跡の古墳時代当時の地表面が

農作業によつて損なわれることなく、

現代の発掘調査において、そっくりそのまま

全貌を表わした

と解される。

なお橋牟礼川遺跡には、平安時代の貞観十

六年三月四日(西暦八七四年三月二五日)の

日記に付けがわかる地面もある。

物家のなかから、火山人灰の重みで壊れた掘立柱建

物家のなかから、火山人灰の重みで壊れた掘立柱建

杭列、島跡、道、河川、土壌墓群、木槨墓や

木槨墓であった可能性もあろう。などが発見

された。(5)一十二、十五頁。十八、二十頁参照)

橋牟礼川遺跡は、このように、

日本のポンペイ

と、今後、さらに多くの事実が判明するだろう。

加世田蔵
古代の日本3大川
100頁に貼有

④ 688^{h-3}/₈ と同じ 695^{p-1}/₂₈

古代の日本 3 九州 103頁上 45
かこいば考古新地 144頁～

つ折、南九州地方の巻物としては

- ① 羊に穴を掘って通築した巻
- ② 地下空石巻 かあつたようである
- ③ 横穴巻

① かもーま考古新地図 南日本新聞社、雄
山閣、昭和六十一年六月発行。
② 古代の日本 九州、鏡山猛・田村圓澄
角川書店、昭和四十五年二月発行。
③ 朝日新聞 平成十八年十月三十一日付へ
り変わる 卑人像
④ 熊本県本渡市文化財調査報告第1集 妻の
の鼻墳墓群 本渡市教育委員会、昭和五十七

南九州に見られる各種の墓制

南九州の墓制を一括して述べることは出来ない。

・多様な形式の墓が存在しており、どの部族の葬法だったのかを見極めるのは、非常に困難である。

(第177回参照)

トル

あえて思うところを述べてみた